

一滴の水であつても

ある悲痛な話を聞いて一年たったが、どうしても忘れ去ることができない。幼児を抱えて離婚した若き母。その愛児も病死さすという最大の不運に遭う。傷ましくもお骨を納める所がないと泣き暮れている。

「ゆり籠かごから墓場まで」。この言葉は福祉の根本理念とされて久しい。しかし、この国は人間最終の安息場所については全くの無責任を通してしている。この若き母の歎きは今後激増するばかりであるのに。温かい永遠の眠りを保証する共同墓や納骨堂を自治体は急ぎ工夫し用意すべき責任があろう。わずかに東京都が納骨箱（雑司ヶ谷）一カ所を設けているが、駅のロッカーと変わりない。

弘法大師の眠る高野山でも一億円をこす「会社の墓」が出現し、すでに百個をこしている。社員名のみ列記の碑にとどまり、部外者には企業広告塔としか映らない。納骨は全く考えられていないから。

私たちのホーム任運荘の納骨堂に三柱だけが安置され、まだ余裕がある。私はこれ

を公開活用しよう。たとえ一滴の水に等しい微小な試みであろうとも。全国から、宗教に関係なく、貧しければ無料で。希望者が増えれば増築も。遺言、予約の申し込みも予想しよう。

このお堂、その名は「平和祈念堂」。日本の良心、茅誠司先生が命名され、ご揮毫きごうが深く刻みこまれている。「平和」を縁まとして祀まつられる魂たまが結びあう殿堂。私もそこに入ろう。それまではここの堂守。

(一九九三年四月十二日)